鉾田一高同窓会報

No. 61

発　行　茨城県立鉾田第一高等学校
同　窓　会
鉾田市鉾田1090の2
TEL(0291) 33-2161
編　集　同窓会会報編集係

会報発行にあたり

同窓会長　荒野吉生（昭48卒）



会員の皆様方には、平素より本会運営につきまして、温かいご支援ご協力を賜り心より御礼申し上げます。母校も早いもので百周年から四年目を迎え、新たな歴史を歩んでいます。

昭和二年設立の本会も百周年を迎えようとしています。大正・昭和・平成・令和と四代を絶え間なく歩み続け、国内外で活躍し、母校の名声を発信し続けて居られる多くの同窓生の皆様には改めて敬意を表します。

しかしながら、本会の事業活動と言えば個人情報保護法制定後、支部活動も同窓生の把握が出来なくなり休業状態です。年度総会も近隣の同窓生の減少等により年々参加者が少なくなっているのも現実です。特に総会は「例年八月の第一土曜日」と決定していますので是非参加をねがいます。

今、毎週土曜日の「茨城新聞」紙上の「同窓の友」欄に本校卒業生の掲載が目立つようになってきたと思います。数年ごとの開催ではなく、年数回とは申しませんが、現在はグループラインなど簡単に連絡ができますので、十名程度のミニクラス会でも良いですから開催するようお願いします。それが他クラスの同窓との繋がり、先輩後輩との繋がりにも進展し、最終的には、会の発展、活性化にも繋がりますのでよろしくお願いしまして挨拶といたします。

ごあいさつ

校長　飯山美都子



同窓会の皆様には、日頃より本校の教育活動にご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

六月、文化祭実行委員長の山本秀さんのパフォーマンスで幕を開けた「山王祭」は、生徒たちが学校との協議でルールを定め、自治のあり方を学ぶ格好の機会となりました。ユニークなクラス企画や質の高い発表で、約三千人のお客様を楽しませることができました。人を楽しませるために努力できる素直な気質の上に、本校での教育を重ねることで、鉾一生は、次代を担うグローカルリーダーとしての歩みを進めています。その根本にあるのが創立以来の「剛健勤勉・独立自治・和衷協同」の精神であり、文武不岐の校風です。

進学面では、令和七年度は筑波大学、茨城大学、県立医療大学合わせて三〇名、全国で五三名が合格し指標を達成しました。私立大学も青山学院、明治をはじめ四一七名が合格。また、連携協定を結んでいるマレーシアの大学にも一名が合格しております。

部活動では、競技かるた部の中高ともに全国大会出場が決まり、高校は十連覇を達成しました。関東大会には、陸上競技部の三十一年連続出場をはじめ、吹奏楽（中高）、男子ソフトテニス、女子ハンドボール、水泳部が出場し、目覚ましい成果を上げています。

これからも地域と繋がり、世界を見据えながら、生徒の未来を育む教育を進めてまいります。今後とも、皆さまの変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

郷土の歴史や文化を訪ねて

箱根　紀千也（昭48卒）



二〇一五年に公立小学校を定年退職後、以前から興味を持っていた地域の歴史や文化などを研究しています。また少しでも社会に貢献できればと思い、行方市文化協会や地域の郷土文化研究会に所属し、何れも会長として企画運営等に参加しています。後者としては、毎年機関誌『玉造史叢』を発刊していますので、自分自身でも論文を書くと同時に、その論文募集や編集及び校正等も行っています。さらに充て職として、市の審議会委員を委嘱され、会議に参加することもあります。

高校時代は友人に誘われ、歴史クラブに属したこともありますが、現在行っている研究は当時とは大分異なります。研究の内容・対象・方法においても、より専門的なものを好むようになりました。以下に、近年の研究の傾向について触れてみます。

近年、歴史の通説が、一次史料（同時代史料や事象の当事者がその時点で書いた物）やそれに準ずる史料又は発掘調査などにより、少しずつ覆りつつあります。例えば、明智光秀は事件当日本能寺には居なかった。小早川秀秋は関ヶ原現地での戦い以前に裏切っていた。魚鱗や鶴翼といった関ヶ原の陣形は、明治以降の陸軍参謀本部による創作であった。こうした話は試験には当然出題されないでしょうが、歴史好きの人間にとっては少しショックでした。

行方市の歴史も決して例外ではありません。先達の記した文章の中にも、確定できないものや疑問視されるものがあります。それらを検証し、真実に近いものにしていくのも、私達に課せられた使命ではないでしょうか。

教職在任中少ない暇を見付けては、学者や研究家の著書を読んでいました。時おりなぜか納得できない論述に出会うことがありました。それまではあまり疑問を持たずに読み進めていたのですが、どうしても気になりました。そこで同時代の古文書の原本（特に一次史料）を見て確かめることにしました。幸いネットで見られる物もあり、複写や画像を取り寄せたり、現地へ行き閲覧したりしました。

すると、気になった部分の多くは、主に後世に書かれた史料や読み物・軍記物・家譜類といった二次史料を基に書かれていることが分かりました。また、フィールドワークと称して、子孫だと言う家の伝承をそのまま記している研究もありました。当家の言い分を尊重したい気持ちは分かるのですが……。それについても、一次史料を基に検証しました。

こうして調べたことをまとめて、定年の年と翌年に本（『新選組局長芹澤鴨』『新選組水府派の史実捜査　芹澤鴨・新見錦・平間重助』）を出版しましたが、最初は中々信じて頂けませんでした。十年近くが経過し、一部の研究者から認められるようになりました。このため、昨年十月ＮＨＫの「歴史探偵」に出演し、自身の研究内容の一部を紹介させて頂きました。近年歴史の通説が覆り、多くの真実が明らかになるのに呼応し、こうした在野の研究も少しずつ受け入れられるようになりました。

この研究のために役立っているのが、古文書に書かれたくずし字の翻刻と大意を読み取ることです。退職する数年前から、研究内容に関わる古文書を読むためのくずし字の入門書を読み始めました。最初は殆ど分かりませんでしたが、今では、基本的なくずし字なら五割ぐらい読めるようになりました。もっと早くから始めていれば良かったと思います。現在は、ボランティアとして自主的に、行方市が所蔵する古文書の翻刻作業を字典を見ながら行っています。読めないところは上級者に聞くようにしています。

このように、一部の歴史研究を全国的に取り上げて頂くようになったのは、第一に、一次史料の閲覧が私達の身近になり、学者だけが享受する特権では無くなったことに起因すると思います。特に、ネット上で閲覧できるなど、科学技術の発達がもたらした功績は多大です。第二に、在野の研究家の中にも、歴史の真実を追究しようとする熱心な方がいるからだと思います。第三に、近年の急速なＡＩ技術の発展により、最新研究を取り入れた知識の累積や整理が格段に進歩したためだと思います。証明できないことに対してＡＩは、「そのような一次史料はない」と明言してくれるので実に有り難いです。いずれ多くの史実が明らかにされ、二次史料からの孫引きによる論述は、少なくなるでしょう。これから趣味を生かしたいという方々の参考になれば幸いです。

往時

医師への道

野口隼汰（令5卒）



はじめまして、令和四年度卒業生の野口隼汰です。二年間の浪人生活を経て、二〇二五年四月に昭和医科大学医学部医学科に入学しました。高校時代はサッカー部に所属し、キャプテンを務めていました。顧問の先生方のおかげで、サッカーの技術だけでなく、人としても成長できた三年間だったと感じています。

幼いころから医師という職業に憧れは抱いていましたが、鉾田一高から医学部への進学者が過去二十年間なかったこともあり、自分には難しいのではないかと考え、当初は他学部への進学も視野に入れていました。実際、高校入学後は部活動中心の生活で、勉強への意識も高いとは言えず、成績は学年でも中位程度にとどまっていました。

転機となったのは高校二年の夏です。部活動後、スクールバスの時間まで尚志館で課題に取り組む中で、受験勉強に励む先輩方の姿を目にし、自分も本気で勉強に向き合おうと考えるようになりました。毎日勉強する習慣はつきましたが、自分に合った勉強法が分からず、やりっぱなしの状態になり、成績は思うように伸びませんでした。模試の偏差値も総合五十前後で、医学部はもちろん難関大学を目指すには厳しい状況だったため、高校三年の十一月頃には浪人を決意していました。現役時には私立医学部一校と防衛医科大学を受験しましたが不合格でした。

実家が神栖市にあるため通学圏内に適した予備校がなく、都内の学生マンションで一人暮らしをしながら四谷学院四谷校に通うことになりました。一浪目は、基礎から段階的に学び直すカリキュラムのもとで勉強を進め、学力の土台固めができたと感じています。一方で、一人暮らしという環境もあり、生活リズムが乱れがちになるなど、自己管理の難しさも痛感しました。一日十時間程度の勉強を継続しましたが、結果としては私立医学部六校を受験し、自治医科大学で補欠となったものの繰り上げには至らず、二浪することになりました。

一浪目の反省を踏まえ、二浪目は実家から河合塾津田沼校に通うことにしました。片道二時間半という長い通学時間でしたが、毎朝五時過ぎに起床し、六時前に家を出て通学しました。移動時間は貴重な学習時間と捉え、前日の授業の復習や英単語・英熟語の暗記に充てるなど有効に活用しました。また、自分は立っている方が暗記がしやすいと感じていたため、特性も踏まえて学習内容を工夫しました。

九時前に予備校へ到着し、十九時まで授業や自習を行い、その後電車で二時間半かけて帰宅する毎日でした。限られた時間を最大限活用するため、夕食は駅からの車内で済ませるなど工夫し、勉強時間の確保を意識しました。休日は公民館や図書館を利用し、朝から夜まで学習に取り組み、二浪目は一日十三時間程度の勉強時間を継続しました。また、難しい問題に手を広げるのではなく、自分のレベルに合った予備校の教材に繰り返し取り組むことで、着実な学力向上へ繋げました。その結果、昭和医科大学、日本大学、藤田医科大学に正規合格しました。

一般的に私立医学部は学費が高いというイメージがありますが、実際に多くの大学で六年間に約三千万円前後の学費が必要とされます。昭和医科大学も例外ではなく、学費は約二七〇〇万円です。私の家庭も普通であり、この学費を全額負担することは容易ではありません。そのため、茨城県の地域枠制度を利用しました。これは六年間で一八〇〇万円の貸与を受け、卒業後九年間、茨城県内で医療に従事することで返済が免除される制度です。学費を理由に私立医学部への進学を断念する受験生も多い中で、将来地元の医療に貢献したいと考えていた私にとって、この制度は大きな支えとなりました。

医学部受験は決して簡単な道ではありません。しかし、超進学校とされる高校出身でなくても、突出した地頭がなくても目指せるのも事実です。私自身、下からのスタートでしたが、常に自分の限界まで努力を積み重ねることで夢を叶えることができました。

大学受験は、自分一人で乗り越えられるものではなく、家族や友人のサポートがあってこそ成し遂げられるものです。これから進路を考える後輩の皆さんには支えてくれる人への感謝を忘れず、自分が納得できる目標に向かって努力を続けてほしいと思います。

近時

母校だより



教頭　荒井　孝幸

同窓会の皆様には、平素より本校教育活動に格別のご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。令和七年度から令和八年度にかけての状況を報告いたします。

令和七年四月に入学式を挙行しました。高校新入生二四〇名（附属中からの進学者含む）、附属中新入生四〇名を迎えました。

五月の後援会総会は、公開授業や大学入試説明会、進路講演会を実施しました。六月には山王祭を二日間実施し、二日目には、一般公開を行い、大盛況となりました。

七月には、全校野球応援、十月には、高校の全校クラスマッチ、二月には、附属中のクラスマッチ・体育祭を行いました。

二年次生は、十一月に文系は、長崎方面、理系は、北海道方面への修学旅行を実施しました。本州とは異なる自然や特色ある歴史文化に触れるとともに、国立大学の学生及び留学生との交流を通じて、進路選択への意識を高めることができました。

さて、令和八年四月は、高校新入生二二八名（附属中からの進学者含む）、附属中新入生四〇名を迎えてスタートしました。

五月の後援会総会では、各学級での公開授業、後援会総会、学級懇談会（高校三年次は大学入学説明会）を実施しました。

六月の山王祭は、「Beat～打ち鳴らせ山王の鼓動～」のテーマのもと、第一日目の校内公開、第二日目の一般公開ともに、クラス展示や発表において大いに盛り上がりました。

学年同窓会

平成六年三月卒業生は学年同窓会を開催している。平成十六年を第一回に、十年毎の開催で、今回三回目は五十歳の年という。代表幹事の濱口栄里さんを中心に、出欠等の事務はハガキでなく、専用サイト（https://hokol-dosokai2025.jimdosite.com）を立ち上げて行った。七七名の参加者があり、恩師五名も出席。大変盛況であったそうだ。詳細は、前出のサイトで。



2025・10・12　於：鉾田市内

令和７年度同窓会会計収支決算報告書

（単位：円）

収入総額	4,940,803
支出総額	3,462,283
差引残額	1,478,520

収入の部

科目	決算額
入会金	2,220,000
寄付金	0
繰越金	2,712,660
雑収入	8,143
合計	4,940,803

支出の部

科目	決算額
幹事会及び総会費	10,558
本部活動費	483,775
支部活動費	0
入会式費	234,650
慶弔費	86,500
積立金	2,000,000
予備費	646,800
合計	3,462,283

令和７年度特別会計報告書

同窓会積立金	14,317,722

令和七年度進路状況

◎四年制大学進学率
五年度　八〇・九％
六年度　八五・八％
七年度　八五・一％

◎卒業生進路状況
国公立大学　五三名
（現役合格者延べ五〇名）
私立大学　四一七名
（現役合格者延べ三七八名）
短期大学　一名
専門学校　十二名
就職　二名
その他（浪人等）　十八名

叙勲（令和八年春）

旭日双光章
荒野　吉生（昭48卒）

瑞宝双光章
土子　明良（昭45卒）

瑞宝小綬章
小沼　光一（昭49卒）

瑞宝小綬章
山口　正雄（元校長）

訃報

次の会員が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

なお、慶弔規定により香料を差し上げました。

土子　勇一（副会長・昭49卒）
方波見成生（昭43卒）
田山　好一（昭29卒）
藤野　達也（顧問・昭30卒）

藤野達也氏は下河邊康志氏の後を受けて、本会第十六代会長に就任し、令和三年から五年度まで会長を務め、百周年関係の事業等の実現にご活躍されました。

編集後記

今回から会報をタブロイド判四頁からA四判四頁に変更しました。担当も、田山から久保・高安・邊田に代わりました。田山先生お疲れさまでした。今号からインターネットでも見られるようにする予定です。ネットで鉾一同窓会を検索していたら、学年同窓会のサイトがありましたので、割付後でしたので、扱いが小さくなりましたが、幹事の方にお願いして載せました。今後、クラス・学年会等開催の記事・写真も掲載できたらと考えています。